

<論説>認知と伝達：言語社会学の方法的枠組に向けて

著者	成田 康昭
雑誌名	社会労働研究
巻	30
号	3-4
ページ	59-90
発行年	1984-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018307

認知と伝達

——言語社会学の方法的枠組に向けて——

成田 康 昭

一 境界領域へのアプローチ

通常、複数の学問領域にわたる研究は一括して境界領域的研究と呼ばれている。しかし、そのようなアプローチが個々に持っている問題の特性は決して一様ではない。

問題が境界領域にかかっていたとしても、解明しようとする対象が何らかの具体的な現象である場合には学際的研究のプログラムは比較的容易にたてることができる。関係する複数の学問がそれぞれの解法を並列的に提示すれば一応の成果は得られるからである。また法社会学や教育社会学といった境界領域的な社会学の分野は、それらが特定の対象化しやすい系を対象としている限り、その相手側の系に対して社会系を下位体系として接合することによって方法論を構成することができる。しかし、境界領域としての言語社会学には、これらの境界領域へのアプローチとは全く異なった、人間存在にとって言語が持つ本質的な契機に由来する独特の問題が含まれている。

言語は、それ自体がいわゆる「ラング」として一つの社会的なシステムをなしているだけでなく、様々の社会的な

行為系や、文化的な価値体系にとつての——多くの場合唯一の——表現メディアである。したがって、これらのシステムのデータはいずれも言語という形をとつて与えられる。いうまでもなく、言語学や社会学は、その言語的データに対して準拠するべき系を分析的に俊別することによって記述される。対象を言語現象と見るか、あるいは社会現象と見るか、その境界線をどのように設定するかによって、描き出されるシステムの姿は全く違ったものになる。

このような関係にある二つの学問の間には、厳密に言えば「境界」領域は存在しない。⁽¹⁾なぜなら、どのような中間領域をとつても、「それは原理的に社会学の（あるいは言語学の）問題である」と主張できるからである。何らかの理由で、社会学（あるいは言語学）という従来の外延を残したまま、対象の拡張を図りたいという動機がはたらく時にだけ、「言語社会学」あるいは「社会言語学」という名称が用いられる。

実際、言語社会学についての方法的な提案は、単純に言語学的変数を加えた社会学や、社会学の変数を取り入れた言語学であろうとするものはむしろ稀であり、⁽²⁾非常にしばしば、既成の社会学や言語学自体の対象像や体系を記述する際の前提の立て方に対する根本的な異議申し立てを含んでいる。境界領域としての言語社会学は、言語学や社会学が投錨点を深るための浮標としての役割りを負うているのである。⁽³⁾

例えばわれわれは、言語を「集団的精練の産物」とみなしたデュルケームによって主張された言語社会学を思い浮べることができる。この言語の社会決定論に立つ言語社会学は、メイエ、ヴァンドリエスといった後継者達が、同時にソシュールによつてたてられた「内部言語学」と「外部言語学」という区別にもっと注目していたら成果は違ったものになっていただろう。

ベンヤミンは一九三四年の『言語社会学の問題』⁽⁴⁾の中で心理学、文化人類学、精神病理学などから、人間と言語に

関する研究をたんねんに集めて分析しているが、その際に考察の中心となったのは「言語の起源」であった。すなわち、人間はいかにして象徴的表出の体系たる言語を獲得したのか、という問いを、人間にとって思考とは何なのか、さらに、人間にとって社会とは何なのかという問いといっしょにして解く方途を求めている。

この十年ほどの間に盛んに行なわれるようになった社会言語学(sociolinguistics)では「人間のコミュニケーションはそれが実際に行なわれる社会的文脈に敏感なものであるために言語が理解されるのはそれが用いられる際の機能においてでしかない⁽⁵⁾」という主張を持っている。B・バーンステインの行なった研究は話しことばのコードが、ある社会階層の中でどのように発達させられ、扱われるかという問題についてであった⁽⁶⁾。このような研究は社会学的方法的な枠組みに対しては何ら改変を迫るものではないが、会話のようなより大きな言語単位においても、それが用いられる社会的場面を系統立てて調べていけば有意味なコードをとり出すことができる、という点で、言語学の対象像に修正を迫るものである。

バーガーとルックマンの言語社会学についての考え方は、ある意味では本人達が言うようにデュルケームの考え方の延長上に位置させることができる。彼らは次のように書いている。「知識社会学についてのわれわれの理解からは、次のような結論が得られる。それは、言語社会学や宗教社会学を社会学理論そのものにとってあまり興味のない、周縁的な特殊分野として考えてはならず、むしろ社会学理論の構築にとって必要不可欠な寄与をなすものとして考えねばならない、ということである⁽⁷⁾」。彼らの言語についての理解は、集合表象としてのデュルケームの言語概念と、シユッツの「解釈図式」と関係づけられた記号の概念とを結合させたものだといえる。つまり彼らは人間が言語を獲得する過程と、広義の人間の社会化の過程をほとんど重ねて理解している。したがって、言語が媒介する現実の認知枠

自体にまで、いわば社会系の定義が及んでいると考えているといえる。これほどまでに社会系の範囲が言語系に接近し、あるいは重複してとらえられたことは社会学史上かつてなかったことだといってもいいすぎではなからう。⁽⁸⁾

本稿では、このバーガー・ルックマンの言語についての概念をタテ軸にとって、言語社会学の方法的枠組を構想する上でのいくつかの問題点について検討を加えてみたい。ただし、ことわっておかなければならないが、筆者はバーガーやルックマンの、あるいはもっと広く「現象学的アプローチ」と呼ばれている立場を必ずしも支持していない。言語現象を社会系の論理の下に、社会現象とみなして取り扱うという方法的立場、あるいは社会現象や文化現象つまり行為系や価値体系に属するものを言語現象とみなして取り扱うという立場からは何らかの方法上のメリットが生れる可能性がある。⁽⁹⁾しかし、言語系の論理と社会系の論理を統合しようとしたり、あるいは既に統合されたものとして取扱うところには、境界領域の方法上のメリットは生まれてこないと考えるからである。

例えば、バーガーは「制度」の概念の特徴を説明しようとして、言語は最も基本的な社会的制度である、という言い方をしている。バーガーによれば、言語は「個人がその生涯で遭遇する最初の制度である」⁽¹⁰⁾。そればかりか、国家のような制度についての説明であっても、「それを言語に当てはめてみた時に、一般論として意味をなさないとすれば、その説のどこかに欠陥があると思つてさしつかえない」⁽¹¹⁾とまで言い切る。このような陳述を前にして、標準語や文字法の制定といった「言語制度」という概念をどう位置づけたらいいのか、途方にくれている社会言語学者の顔が目に見えるようだが、その問題はひとまず措くとする。今問題にしたいのは、こうして社会系の論理で言語を定義した時にどんな結果を招くことになるかである。

バーガーは制度の基本的特徴として、「外在性」「客観性」「強制力」「道德的権威」「史実性」をあげている。この

ひとつひとつについて、バーガーは言語から都合のよい例を引いてくる。

英語は話し手の特異な創造に基づかない何ものかを通じてなされるという意味で△外在的▽であり、その英語が△正しい▽かどうかは△客観的▽な事実であるという。⁽¹²⁾確かに言語の音韻体系や文法、語彙といった、「ラング」は個人にとって△外在的▽であり、△客観的▽であることを否定する言語学者は存在しないであろう。しかし、意味的な言語事実が全て△外在的▽、△客観的▽であるとはいえない。例えば、ある人がある場所で、どんな言葉の選び方をし、どんな調子で話したかは、有意意味な言語事実だが、バーガーのいうような「話し手がこの言葉を用いるはるか以前から存在していた」⁽¹³⁾ものではない。また、彼の話し方は彼自身の主観的意図とは全く異なって、聞き手に「せっかちな」とか「冷たい」といった意味を読みとらせたかもしれない。これも、有意意味だが聞き手にとって△主観的▽な言語事実である。

バーガーは言語の制度としての△強制力▽を証明する段になると、一転してこのようなパロル的な言語事実をひきあいに出す。例えば仲間ことばを話せない子供が嘲笑と迫害を受けたり、軍隊に入っても中流階級的な「上品な」口のきき方を止められない若い兵士が被る災難といったものである。これらは実は言語形式に付着した社会的な意味について述べているにすぎない。子供どうしの迫害の原因には、語法上のいいまちがいでなく、全く同じ資格で、「着ているモノが贅沢すぎる」とか、「皆と違うモノを持っている」とかいった事柄でもありうる。

ある言語共同体はその成員に対して、皆と同じ言語を話すように促すことは確かである。その意味でなら言語が△強制力▽を持っていると認めることは可能である。しかし、それは制度による強制とはニュアンスがかなり違うことも事実である。方言Aを話す人が方言Bの地方に移り住んだ場合に、この話者が方言Bを、いつ、どのようにして

話しはじめるかは、パーソナルな条件以外に、方言Aと方言Bとのいわば力関係のようなものによって変わってくる。その力関係は文化的な評価の差である場合もあるし、言語体系に内在する何らかの要素に起因するものである場合もある。違う方言を話す話者が受ける△強制力▽自体がこうして変化するのである。この問題は日本における「言語生活研究」の大きなテーマの一つとなっている⁽¹⁴⁾。

また、バーガーにとって都合の悪いことに、外来語や専門用語が「自分は皆とは違う」ということをひけらかす目的で使われることがある。仮に、その言葉が彼が潜在的に帰依している規範（例えば「知的」とか、「芸能界的」といったたぐい）の標識として用いられていたとしても、社会の△強制力▽は彼にその皆とは違う言葉の使用を止めさせることができなかったのである。

言語の△道徳的権威▽については問題はさらに微妙である。バーガーは「特なお国訛りという重荷を背負った気の毒な移民」や「まちがった隠語を使って結果は自分が『キマッテ』いないことがばれてしまう前衛的知識人等の苦しみ⁽¹⁵⁾」を例にあげている。しかし、例えば、日本において白人種に属す人間が、訛りのある日本語を話すことは、むしろ好感を持って受け入れられることがあるという事実は、△道徳的権威▽の見地からどう説明できるのだろうか。どのような社会関係において、どのような言語要素が道徳的権威を持つのかは、それ自体社会言語学の主要なテーマの一つではあり得ても、決して「言語には道徳的権威がある」と言い放つことはできないのである。

かくして、筆者にはバーガーが言うような意味で、制度についての一般的説明の「どこかに欠陥がある」かどうかをチェックするために、どうやって「言語に当てはめ」ればよいのか、皆目見当がつかないのである。バーガーは、「言語は、他の何者にもまして、社会制度△そのもの▽である」と言う。こうした行き過ぎた定義を正当化するため

に、言語にとっては部分的にしかすぎない諸特徴を言語自体の基本的特徴として格上げせざるを得ないハメに陥ってしまっているのである。

さらに重要なことは、言語においては基本的特徴であるものを、行動の規範的様式たる社会制度は持っていないという点である。例えば、言語は弁別的体系であることを基本的特徴としている。すなわち、現象を弁別して単位を形成し、その単位を結合させてより上位の単位をつくり、かつ単位間に構造的な関係をはりめぐらすような系である。これは、ある種の規範体系には見出せる特徴だが、社会制度の基本的特徴ではあり得ない。また、言語には、⁽¹⁷⁾少ないエネルギーでより多くの情報を伝えようとする一種の経済法則が存在している。⁽¹⁸⁾この特徴は言語が他の情報通信システムと共有するところであって、規範的様式たる社会制度とは関係ない。その他にも、言語に必ずついてまわっている美的機能や「あそび」の機能も社会制度には見当らないことが多い。

バーガー・ルックマンの主として、『日常世界の構成』で展開されている言語論は本稿ではもっぱら批判的検討の対象とされなければならないだろう。それでもなお、バーガー・ルックマンの枠組みにこだわる理由は二つある。一つは、デュルケーム的な意味での社会の客観的な事実性と、ウェーバー的な行為の主観的な意味連関という二つの側面を「一つの包括的な社会的行為の理論のなかに結びつけ」ようとする展望の広さである。理由の二つめは、バーガー・ルックマンの概念の布置の中で、言語は、主観的現実と客観的現実を契合させるきわめて重要な位置を与えられていると考えられる点である。本稿が目的とするのは、バーガーがとり出した言語についての主要な論点から、境界領域としての言語社会学が内包している問題の所在を確めることである。

二 主観性と客観性

バーガー・ルックマンは、個人の主体的な心理過程の中に現れる社会と、個人によってはどうすることもできない集合的な事実としての社会とを、同時的かつ総合的に把握しようとする。いいかえれば、主観的現実としての社会と客観的現実としての社会という二つの側面を、切れ目のない論理の中に理解しようというのである。彼らによれば、そのためには「社会を外化 (externalization)」、対象化 (objectivation)」、それに内在化 (internalization)」の三つの契機から成る不断の弁証法的過程として⁽¹⁹⁾「把握しなければならない。社会はまずもって個々の人間の行為からなっている、しかしその行為は一担社会的な意味において行なわれると、行為者の主観的な意図から離れて独立したものとなる。つまり、間主観的で集合的な事実として対象化され、客観的な「現実」となるのである。そして、そのような「現実」は一転して、個人に対して強制力を持つようになる。個人は社会化過程において、社会的な「現実」に適合するようにつくられるのである。いうまでもなく、このような問題構図は社会学の中心的なテーマの一つであるわけだが、この研究(『日常的世界の構成』“The Social Construction of Reality”)は、この問題構図を「日常的世界」における間主観的な意味構成に絞って、前述のような弁証法的過程として総合的に解明しようとしているのである。

バーガー・ルックマンは、人間の「日常生活」における主観的意味連関を、シュッツに負うところの大きい現象学的方法によって解明しようとする。彼らはシュッツにならって「現実」の複数性を認めるところから出発する。人の意識の中には、想像や夢想、それに宗教的経験、あるいは株屋の景気に対す直観や数学者の形而上的な思考、といった様々な「現実」が現われる。しかし、その中で唯一「日常生活」だけは特権的な地位を持った「現実」であるとい

う。この「現実」は常態的であり、かつ自明のものとみなされているだけでなく、他者によっても共有されている世界、つまり間主観的世界としてあらわれる。

この「日常的世界」においては、時間もまた誰にでも通じる時間構造を持った、間主観的時間としてあらわれ、その時間的秩序を「私」に強制する。「私」はこの「日常的世界」を異和感なく受け入れ、その自明性そのものの中に浸り込んで生きている。つまり、「私」は「自然的態度」⁽²⁰⁾を生きているのである。

いいかえれば、このような「日常的世界」においては、主観的現実と同時に客観的現実でもある。もっと正確に言えば、「日常的世界」では主観的意味連関は、断えず対象化されて客観的現実としての意味づけを与えられている。「日常的世界」では、いかなる事物も現象も主観的な意味のまま浮遊することを許されない。それらは、他人にも同じようにして意味を理解できるような、間主観的な意味を持った事物にならなければならないのである。

こうした対象化についての機制の中で、バーガー・ルックマンが、言語に特別の意味を与えたのはある意味で当然だったといえる。

「対象化という行為の特殊な、しかし決定的に重要な一つのあらわれは、意味づけるという行為、つまり人間による記号の創造という行為である」⁽²¹⁾。

「日常生活において対象化された共通の事物は、なによりもまず言語による意味づけによって維持されている。日常生活とはなによりもまず私が他の仲間たちと共有していることばを伴った、そしてまたことばという手段を通じての、生活である。それゆえ、ことばを理解することは日常生活の現実を理解するうえで必要不可欠な条件となっている」⁽²²⁾。

言語（＝ことば）には、対象となった事象に意味の枠を設定するという認知的機能と、そのようにして意味づけられた記号を他者との間で交換するという間主観的な伝達機能がある。このような文脈の中で言語が事象を客観的現実として対象化するための媒体と指定される理由は、この言語に内在する二つの機能にあると見てよい。つまり、「日常的世界」が、不断に主観的現実を客観的現実置き換えることによって成立するものである以上、個人の存在論的な意味の世界と、客観的かつ社会的な意味の世界の両者を、支配し、管轄する意味的なシステムが不可欠となるのである。実際、バーガー・ルックマンは、言語を、主観的現実と客観的現実の、「両方向における不断の翻訳過程」の基本的な媒体となる⁽²³⁾と位置づけている。

われわれはここで立ち止まってみる必要がある。個人の主観的な意味の世界と、社会の客観的な意味の世界という両者を、両方向の翻訳がただちに可能なほど支配するシステムというものが存在し得るだろうか。もし、言語が客観的な意味の世界を十分に管轄するシステムであるとすれば、それは事象についての完全な意味の目録を備えていなければならない。一方、もし言語がそのような客観的な意味のシステムであるとするならば、言語が主観的な意味の世界を管轄するというのは論理的におかしいことになる。なぜなら、もしそのような意味での言語が主観的な意味の世界を管轄していれば、その完全な意味の目録によってどのような主観的な想念もたどころに客観的な意味を与えられてしまう。つまり、定義上主観性というものが存在し得なくなってしまうからである。

バーガー・ルックマンは、あるいはこう反論するかもしれない。逆に、そのようにして主観性が不断に間主観性によって置きかえられるという点にこそ「日常生活」という特殊な意味場の本質があるのだと。だが、もしそうだとすれば、「日常世界」には主観性が存在する意味がなくなってしまう。しかし、バーガー・ルックマンは、他の場所で、

「日常世界」における主観性の存在をはっきりと認めている。言語とは、主観的な経験を類型化し匿名化することによって成立するシステムなのだ。

例えば狩猟社会の成員で、武器をなくして素手で野獣を倒した者がいるとする。この経験は言語によって語られない限り、永久に彼だけの知的な貯え（沈澱 Sedimentation）となるしかないが、言語化することによって、客観的で匿名化した類型的知識として、その経験を全く持たない者に対しても貯えることができる。⁽²⁴⁾この時、言語化した客観的な知識は、どんなに饒舌に経験を語ったものであったとしても、はじめに体験した者の主観的経験と同じものには決してなり得ない。また、いくら「日常世界」が間主観性の優位の下に置かれていたとしても、素手で野獣と遭遇したその時に、その経験を逐一、ことばに翻訳するわけがない。内言があったとしても、せいぜい「クマか?」「来る! ウワッ!」といったところが全てだろう。この事情は、もっと平凡な日常の場合でも基本的には変わらない。例えば、今晚食べた夕食のメニューを言語的にはっきりと言えなかったとしても、われわれは無意味な食事をしたのではない。今はもうわからなくなってしまうとしても、食卓でなら必要さえあれば、メニューについて言語的に意味づけできるであろうし、また、今晚のメニューが、少なくともミミズやトカゲ、あるいは人間の排泄物ではなかったという意味でそれが食物であったことを知っている。

いいかえれば、主観的な経験と言語的表現の間には出来事と構造の関係が存在する。この前提を立てるとすると、今度は言語が客観的な意味の世界を管轄しているという点が危しくなってくる。言語は客観的な出来事に対して、構造的な定義づけを行なっているだけであって、それ自体があらゆる出来事に対する意味の目録ではあり得ないのだ。出来事に対する言語的な意味づけ自体が主観的領域に属していることも十分にあり得る。言語のレトリカルな意味作

用の場合などがそれにあたる。レトリカルな表現においては、社会の他の成員が、ある意味の範囲、それもかなり広い範囲の意味の場の中から任意の一点の意味を受取るであろうことが、間主観的な了解事項となっている。四節で述べるように、この点は、社会の知識、あるいは文化の構造にとって重要な意味を持っている。しかし、ここでの文脈で言うならば、レトリカルで自由度のある意味の受容は、それ自体がまた一種の出来事となるのである。しかも、その意味は間主観的な一義性を欠いている。言語は、言表的形式としてならば、客観性を持っている。だが、意味作用までを含めて、客観性を保証することは不可能である。

主観的な経験に対しても、構造としての言語は、完全な意味づけを行なうどころか、経験が言語的な定義域に入ってきた時にだけ、自分の客観的意味のラベルを取り付けることができるにすぎない。そのような幸運な場合に限って言語は、事象を対象化、できるだけであるとするれば、「両方向における不断の翻訳」を保証することは不可能になる。

そのような関係は、むしろ、主観的現実から客観的現実へという方向の場合には、言語による構造内への位置づけと考えるべきであるし、客観的現実から主観的現実へという方向で起こる場合は、結局はレトリカルな意味の発見、コードの修得、あるいは構造化といった形で考えるべきであろう。このようにして、「両方向の翻訳」の対照性は消滅する。確かに言語は「日常的世界」において起こりそうなこと、ありそうな事象についてのリストを持っている。しかし、それはあくまで、「ありそうなこと」であって、「あるもの」ではない。ここで言語と言っているものは、そうした一種の予想された図式にすぎない。

したがって、言語は決して事象の対象化を保証しない。バーガー・ルックマンは、言語という間主観的で認知的な媒体を、主観性と客観性という調和し難い背反性の中間に挿入することによって、単に問題解決を引きのばしたに過

ぎないのではないだろうか。その結果として問題の輪郭自体まで、このように曖昧にってしまった。少なくとも、われわれにはそう考える理由がある。

その理由とは、言語学自体の中にも、社会学における二律背反と極めて同型的な問題が存在しているという事実である。この背反は一般的には、ラング的かつ内部的な言語構造の研究とパロール的、外部的な言語行為の研究との不一致、あるいは対立という形であらわれる。しかし、この問題を極限まで追い詰めていくと、結局は意味範疇と言語形式との関係という問題に行きつく。そのような研究例についての検討は次節で行なうことにして、ここでは、この主観性と客観性の問題、あるいは間主観性の問題が求めるべきものについて要点を述べておこう。

シュッツも、またそれにならってバーガー・ルックマンも社会的な日常的現実の「自明性」を認めている。問題はこの「自明性」の構造の解明にあるといえる。この「自明性」は一方で、真木悠介が指摘するように、社会とは「われわれ自身に他ならぬ」というもう一つの「自明性」との間で二律背反におちいる。⁽²⁵⁾ 間主観性問題において、明らかにすべきは、この機制なのであって、二律背反の中間に、もう一組の潜在的な二律背反を隠し持った項を設けることではない。(実際、主体的な意味範疇の形成と、客観的な言語形式の使用との間に、「社会体系」を媒介させようとするバーガー・ルックマンの言語学者版の出現も十分に想像できる。) そのような構図は、結局のところ「個々人としての『人間』の内部になにか抽象的な「類的本質」のようなものが分有され⁽²⁶⁾」ているという「神秘」めいた説明に帰着するだろうからである。

三 内在化と言語相対論

バーガー・ルックマンは、社会化を「社会ないしはその部分の客観的世界のなかへ個人を包括的かつまた調和的に導き入れることである」⁽²⁷⁾と定義している。いうまでもなく、彼らにとっては、社会化とは個体発生的な内在化の過程にはかならない。すなわち人間が——この場合は子供であるわけだが——既にできあがった客体としての社会に對面し、その構造を所与のものとして、主観的世界の中に獲得していくのである。この過程は、単にあるコードを一方的に受け入れる、というだけではなく、コードを生成する装置そのものを、主観的世界の中につくりあげる過程をも含んでいるといえる。

その内在化の過程においても、彼らは言語に特別な重要性を付与する。すなわち、「社会そのものの内在化と、社会のなかで確立された客観的現実の内在化」それに「首尾一貫した持続的なアイデンティティの主観的確立」とは、「同じ内在化過程のなかで主観的に結晶化される」のであり、それらの内在化は言語の内在化とともに進行するといふ。「ことばは社会化の最も重要な内容であると同時に、最も重要な用具なのである」⁽²⁸⁾。例えば、「さまざまな動機づけの枠組みや解釈上の枠組は、ことばを用いて、そしてまたことばによって、制度的に定義されたものとして内在化される」⁽²⁹⁾。

ここでは、バーガー・ルックマンは非常に慎重な表現をしている。つまり、言語の「重要性」だけを指摘し、その明瞭な位置づけを避けているようにもとれる。本稿の目的は言語を社会の中に位置づける方法を求めることであるわけであり、したがって、われわれは彼らの慎重な表現の彼方にあるものを見通さなければならぬ。そこでわれわれ

は推定を余義なくされるのだが、社会化と言語との関係は、ここでの文脈からいくつかの関係が想定できる。

最も保守的な考え方は、言語の内在化と、言語による内在化とを全く別のものとして区別してしまうやり方である。この方法は確かに最も安全である。つまり、言語の「重要性」とは、それが社会化に必要な複雑な意味のニュアンスを正確に伝え得る唯一の媒体であるという点に帰着させられるのである。子供を社会化させるためには、言葉を理解させなければならない。その意味で、言語の内在化が社会化の必要条件だという論理は、きわめて当然のこととして成立しうる。そして、そのような社会化と、言語の獲得とは、現象の上ではしばしば競合し、同時平行的に進行するという指摘を付け加えておけばよいのである。

しかしバーガー・ルックマンは、引用文からもわかるように、言語の内在化をそのような社会化の単なる手段とするだけでなく、社会化の重要な内容そのものであるとする誘惑に勝てない。だが、もしそのように言明するとすれば、言語の内在化がどのような意味で社会化であるのか、を明らかにする必要がある。ここでも、保守的な見解と、急進的な見解とがありうる。つまり、言語自体を、社会的な事実の重要なひとつであると考えれば、ここで述べている点は平凡で自明な指摘である。一節で見たバーガーの言語についての見解からすれば、それも十分にありうることだ。一方、言語というシステム自体に、人間の社会化を促すなんらかの装置が存在していると考えられることも可能であろう。バーガー・ルックマンの言葉からは、そのようなニュアンスも、感じられる。

さらに、前節で見てきたような文脈に従えば、「客観的な現実」の内在化は言語の内在化と表裏の関係にあるという、より限局してはいるが強い関係を想定することもできる。つまり、言語、とくに語彙を修得することが、事象を対象化し、「客観的な現実」を構成するという考え方である。例えば次のようにバーガー・ルックマンは言っている。

「社会化の初期段階にある子どもたちには自然的現象の客観性と社会的形成物の客観性を見わける能力はまったくない。たとえば社会化の最も重要な項目としてことばをとりあげてみよう。子どもにとってはことばは物事の本性に属する事柄としてあらわれるのであり、彼はその便宜的性格という考えを理解することはできない。事物はそれが名づけられているところの当のものであり、(傍点原著者)それ以外には名づけようのないものである。すべての制度もこれと同様の仕方でもってあらわれる。つまりそれらはすでに与えられており、変革のしようがなく、自明のものであるとしてあらわれる。⁽³⁰⁾」

バーガー・ルックマンの慎重な表現では、彼らの立場を以上のうちのどれかの解釈に特定することは、結局は不可であろう。そこで、われわれは、言語の内在化の過程、つまり広い意味での人間と言語の關係に注意を向ける必要が出てくる。第一に見ておくべき研究は、子供の言語獲得過程であろう。幸いこの領域は比較的経験データが豊富である。この分野の研究で明らかになってきたのは、子供は言語形式と意味範疇とを全く別な経路で発達させているということである。

パラモは、いくつかの実験と観察データに基づいて、話しことばを識別する力は、すでに生体の心理学的構造の中に備わった特質であると結論している。例えば左半球と右半球の話しことばとそうでない音に対する反応の違いは、生後一週間で示されるし、一カ月程度の新生児は、音韻論的に重要な音声に対しては敏感であるのに対して、音韻論的に不適切な音声刺激には鈍感であるという。⁽³¹⁾それ以後子供は音声を知覚と生産の二つの面で同時に発達させていく。子供がどうやって音韻システムを獲得するのかについては、ヤコブソンが「弁別的特徴の分化」という系統立った説明を行なっているが、まだ定説はできていない。ただし村田によれば、音声のバラエティーのピークが生後一年

前後に存在している点は、多くの観察者の認めるところである。⁽³²⁾このようにして、子供は非常に初期から音韻システム獲得へ向けて発達をはじめが、それは、少なくとも初期においては、意味論的な対象の識別とは全く関係していない。

一方、何らかの象徴機能を持った音声、いわゆる「初語」は10カ月から12カ月にかけて発せられる。当然ながら初語は、この時期の子供にとって構音が容易で、かつ喃語活動で支配的であった音声が用いられる。つまり、子音では[p][b][m][n][t][d]それに母音の[a]が結合して反復形式となったものが圧的に多い。⁽³³⁾したがって、代表的なものは「ママ」「パパ」「ババ」といったものである。しかし、この段階でも、子供はあり余るほどの調音可能な音声からほんのわずかの意味を持ったことばをつくり出すにすぎない。

音韻システムの獲得は、ほぼ幼児期全般をとうして継続するが、その間、子供は音声を音韻レベルで同定することはなく、常に単語として、つまり意味論的単位として同定するということが、いくつかの実験で確認されている。子供は音声を聴覚、音声、音韻、といったレベルでも知覚し同定しているはずだが、子供は「全体的な統語法的・意味論的単位に関心を払う」。⁽³⁴⁾パラモは、無意味な名詞を複数形に変化させたり、無意味な動詞を変化させる形態音韻的なルールの獲得に関する実験に注目している。子供達は、動詞の不規則形を別な単語として扱うために、ルールの般化をなかなか行なわない。しかし、記憶負荷などの要因によって機械的学習が限界に達した時には音韻規則についての知識が発動されるらしい。⁽³⁵⁾

では、意味論的単位としての語彙が言語発達をリードするのだろうか。実は、これも正しいとはいえない。パラモはマクナマラの次のような論議を紹介している。

「両親が犬をその名前で示したとして、犬の色や形や行為や頭または尾でも、あるいは犬の立っている地面などを示しているのでもなく、犬をその総体として示していると、なぜ子供が知ることができるかについての明確な理由はない。明らかに、子供は、概念を形成するために何がカテゴリーライズされるかについての何らかの自然の拘束と、単語を他人が使った時に何を意味しているかを決める何らかの方略とをもっているに違いない。⁽³⁶⁾」

つまり、子供の認知的概念システムは、言語の獲得を先どりする形で発達していなければならない。語は、そのように形成された概念に結合した時に誕生するのである。こうして、言語の獲得過程には三つの、相対的に独立した発達が存在している。一つめは音韻システムの発達であり、次に認知的概念システム、そして三つめに概念と語の結合した意味論的単位の発達である。この三つのシステムは相互作用する。形態音韻的な実験で見たように、意味論的単位と音韻システムは関係しているし、意味論的単位は概念システムと相互に影響しあう。(ただし、概念システムが音韻システムと関係を持つのは意味論的単位を通してである。)三つのシステムはそれぞれ、異った起源を持っている。音韻システムは、少なくとも意味論的なレベル以下の、生体の心理的構造に由来する。また概念システムは、個体が環境と対象を認知する能力に起源を持っている。そして、意味論的単位は、母親や身近かにいる人間との対面的状況における間主観性に由来している。

もし、間主観的な語彙のシステムが、他の二つのシステムに対して圧倒的な支配力を持つとすれば、バーガー・ルックマンの図式は正しいといえる。すなわち、「ことばは社会における私の生活の座標を示すと同時に、その生活の意味ある対象によって充たす⁽³⁷⁾」ということができる。しかし、実はこの点こそ言語研究者の間でも最も見解がわかれるところなのである。バーガー・ルックマンの図式は、「人々はどのようにして、語に意味を付与しているか」とい

言語的事実についての知識が、「人々はどのように \wedge 現実 \vee を構成しているか」についての知識に等しい、というふうに言い換えられる。しかし、この等式が成立するのかどうかは、今後の言語社会学にとっても主要な争点となっていくに違いない。

言語学者や言語心理学者の間では、この問題は「ウォーフの仮説」あるいは「言語相対論」として知られている。つまり、言語と思考の問題として扱えられている。アメリカインディアンの言語を研究したB・ウォーフは、その結果から次のような結論を引き出した。

「個々の言語の背景的な言語体系（つまりその文法）は、単に考えを表明するためだけの再生の手段ではなくて、それ自身、考えを形成するものであり、個人の知的活動、すなわち、自分の得た印象を分析したり、自分の蓄えた知識を総合したりするための指針であり、手引きであるということがわかったのである。……中略……われわれは、母国語の規定した線にそって自然を分割する。現象世界から分離した範疇とか型は、観察者に余りにも身近なものとして面するのでわれわれは気がつかないのである。一方、世界というものは、さまざまな印象の変転きわまりない流れとして現われ、それをわれわれの心——つまり、われわれの心の中にある言語体系というのと大体同じことであるが——が体系づけるということになるのである。⁽³⁸⁾」

ウォーフの仮説は、今日では二種類の命題に分けて考察することが適當であると考えられている。J・ペンはそれを、言語は思考に影響をおよぼすという「弱い仮説」と、言語は思考を決定するという「強い仮説」とに区別している。また、コールとスクリブナーは、言語が異なれば外界は異なった形で経験され概念化される、という「言語相対仮説」と言語の差異は認知の差異の原因となっている、という「言語決定論」とに分けている。

J・ペンは、この仮説をロックとライプニッツ、ハーマンおよびヘルダーとカント、言語相対論と生得観念論（合理論）との対立する思想史上に位置づけながら、フンボルト、サピア、ウォーフと続く「強い相対性仮説」の系譜として描き出している。⁽³⁹⁾ こうした系譜に照らしてみると、バーガー・ルックマンの考え方は、言語相対論の立場、とくにフンボルトの発想と近似性を持っていることがわかる。ペンによればフンボルトは、非インド・ヨーロッパ諸言語と、それらの民族の世界観は言語の内部構造と相対的な関係にあるとしている。フンボルトはいう。「言語は決して対象を表現するのではなく、常に言語生産そのものにおける精神^{ガイスト}を通して絶えず対象によって形成された諸概念を表現する」⁽⁴⁰⁾。しかも、フンボルトはこうした「弱い仮説」から「強い仮説」へと進む。「知的活動と言語とは一つのものであり、互いに切り離すことのできないものである。」この、「強い仮説」と「弱い仮説」との関係はあいまいであり、彼の「強い仮説」は自己矛盾にすら陥っている。⁽⁴¹⁾

一方、コールとスクリブナーは「言語決定論」はこれを検討するのに必要な、発達的な観点からの言語と思考についてのデータがまだ存在していないという理由で、考察を比較文化的なデータに基づく「言語相対仮説」の検証に限定する。彼らは、まず、語彙は、ウォーフが考えたほど概念に対して固定的ではないとする。ウォーフ自身がエスキモーの雪に関する多様な語彙を英語に翻訳できたように、言語間の完全ではないにしても、翻訳の可能性の存在は、概念が語彙に対して柔軟であることを示している。

その上で、彼らは数多くの統制された実験の結果を手ぎわよく整理している。それによれば、「言語相対仮説」についての研究は、大きくは、色の弁別と言語との関連について行なわれた認知的な研究と、言語の構造、とくに文法的な諸特徴が現実世界の見方に影響を与えているかどうかについての研究に分けることができる。このうち、文法的

な研究は例が少ない上、いずれも「言語相対仮説」を全く否定するものであった。これに対して、色についての認知的な研究は、多くの示唆を与えてくれる。

色の弁別についての研究ははじめのうち、相対仮説を裏づけるように見えた。対象の認知の容易さはその対象を弁別する必要性の関数であり、ひんばんに弁別を求められる対象は命名が容易になって意味論的に安定した語彙が与えられるという仮説の下で行なわれた実験では、色を区別する語彙の存在しないスペクトルでは、色自体を区別することがそうでない場合より困難になるという結果が得られた。ところが条件を変えて実験するうちに、全く逆の結果が出る場合があることが明らかになってきた。たとえば「青」(blue)というような短く明瞭な語彙は、同系統のほんの少し違う色と区分するのにはかえって役に立たないのである。

そこで、語彙という固定した単位は放棄され、「言語の生産力」という概念がとられることになった。つまり、語彙上の表現に注目するのではなく、Aという被験者がある色について行った説明を、Bという被験者に聞かせ、Bがその言葉をたよりに多くの色の中から、うまくその色を選び出せるかどうかをテストする。すると、コミュニケーションがうまくいく色とそうでない色のランクが得られる。そこで、こんどはそれらの色の札を、被験者が短時間の間隔の後、正確に再認できるかどうかをテストするのである。結果は、言語的なコミュニケーションがうまくいく色は、弁別も容易であるというものであった。しかも、被験者達が使用する言語によって、弁別の容易な色には明らかに変化が観察された。⁽⁴²⁾

この結果は、語彙と認知の直接的な関係を否定する一方、言語的なコミュニケーションが、間主観的に形成されようとするある概念を伝えるために、語と概念の間に力動的な関係を形成していることを示唆しているといえよう。

コールとスクリブナーは、色の認知について最近行なわれたもう一つの興味深いアプローチを紹介している。その研究によれば、色の性質は、これまでの実験で前提とされていた、非常に明確な物理的変数として記述しうるものではない。この研究では、二〇の違った言語を話す人々に色札を見せて、それぞれ自国語にとって最も基本的な色彩語の例となる色を選び出させた。その結果、驚くべきことにどの言語の話者が選ぶ色の配列も、赤、黄、緑、青、茶、橙、桃、紫、黒、白、灰色の一一の基本色に緊密なまとまりを見せたのである。しかも、追試によって、ニューギニアのダニ族のように、濃い・薄いという二つの色彩語しか持たない人々も、基本色を非基本色より、よりよく記憶することがわかったのである。⁽⁴³⁾ この結果は、対象を概念化する過程が、言語とは全く独立にも存在していることを示している。

言葉と概念についての以上の結論と極めて一致度の高い結論が、これらの実験的手法とは全く違う系統の実証的な研究から得られている。野林正路の提唱する「構成意味論」の方法がそれである。⁽⁴⁴⁾ 彼は、「保持・運搬動作」を対象として、意味体系を描き出している。野林によれば、これまで言語学者は「語」がはじめから体系的な「意味」を持つという神話に余りにも支配されていた。しかし、本来の意味体系は「語」の「意味構造」ではなく、「話し手たち」の『語形』にもとづく『対象』認識のシステム⁽⁴⁵⁾として構想されるべきである。人々は、確かに「ツル」とか「イナウ」「ブラサゲル」といった語彙で、何らかの動作を意味させている。だが、それは単に一回的な現象の中に現われた、表層的な意味のレベル（本稿で意味論的単位のレベルといっているレベル）に過ぎない。人々は実際には運搬という動作に対して、ある安定した間主観的な範疇化を行なっている。言表のレベルよりも細分化した範疇は、語形の併用のパターンの精密な分析から構成される。「ツル」としか表現できない動作と、「ツル」とも「モツ」とも表

現できる動作、それに「モツ」としか表現できない動作があれば、この部分体系には三種類の意味の範疇があるといえる。こうした意味体系が間主観的なものであることを証拠だてるために、意味体系の非常にきれいな分布地図を書くこともできる。ただし、一回的な言表によっては、この意味範疇は伝達され得ない。

以上が、野林の「構成意味論」のごく簡単な要約だが、野林が、「ことばが意味を持つ」という立場の意味論を「物象意味論」と呼んでいる点は注目される。野林の研究が示唆しているのは、言語の間主観的事実自体が、対象を認知するシステムと語彙のシステムとの力動的な過程として把握される必要があるということであり、語の存在に物象化（本稿の用語法では「対象化」という特権的な地位を与える意味論の試みには成功の見込みがないということ）なのである。一方、色の認知と言語との関係についての多くの研究からわれわれが受ける示唆もまた、この結論を裏付けている。すなわち言語は客観的な所与として、主観的な世界に現われるのではなく、むしろ言語系が個体の対象認知の構造化と、個体間の間主観的な伝達という二つの要請に適合していくものであると把握すべきことを示しているのである。

バーガー・ルックマンの図式は、こうした認知と言語との力動的な関係を、外化、対象化、内在化、の弁証法的過程として把握しているのだと考えることも不可能ではないのかもしれない。ただしそのためには、図式に若干の修正を加える必要がある。すなわち、内在化と対象化の過程に、記号的過程（言語が媒介となる）と非記号的過程（対象認知）とを区別しなければならない。非記号的過程は、認知科学においてスキーマ（schema）と呼ばれているような、知覚者個人が有する認識の枠組が単位となるだろう。スキーマはかなりの程度、間主観性を有するため、非記号過程から記号過程への編入の可能性を持っている。しかし、両者は平行する過程であって、記号的過程の結果、個体内に非記

号的過程が生じるとだけ限定するわけにはいかない。こうして、弁証法図式は、外化、対象化、内在化のそれぞれに記号的過程と非記号的過程を持たなければならなくなり、かつその関係が交差する点も考慮に入れなければならない。この修正が図式を著しく煩瑣なものにしてしまうことはいうまでもない。しかし、もとのままのシンプルな図式を維持するためには、「物象化」した意味論を受け入れなければならなくなってしまうのである。

四 比喩と間主観性

バーガー・ルックマンは、言語を所与性としての「客観的現実」そのものとして、また、事象に客観的な「現実」としての意味づけをし、社会に客観的秩序を持ち込むためのメディアとして扱った。そのために、言語が言語そのものとして持っている特性である比喩的な力を、全く見逃してしまっている。彼らは、前節で見てきたように、言語が何らかの意味を発生させる機制を、個人の主観的な意識の領域から除外して考えている。一方、比喩はある程度制度的に固定化されたものはあっても、本来、個人の主観的領域の中に起こる意味的な「出来事」である。したがって、彼らとしては、比喩を図式の中に位置づけることができない。彼らが「正当化図式」と呼ぶものも、実は言語の比喩力をバネとして持っているものなのである。しかし、彼らは言語と正当化図式との関係を、例えば次のようにしか説明できない。

「ことばは対象化された社会的世界に対する論理付与の土台となる。さまざまな正当化図式から成る体系はことばを基礎にして築かれており、その基本的な道具としてことばを利用する。こうして制度的秩序に付与された人論理⁽⁴⁶⁾は社会的に入手可能な知識在庫の一部をなすことになり、そうしたものとして自明視されることになる。」

彼らは、この引用の直前で「制度的秩序」に「論理」を付与しているのは、「意味を統合する」という心理的欲求を持った「反省的な意識」であって、「論理は制度とその外的機能のなかにあるのではない」とことわっている。にもかかわらず、言語は結局思念されたことの結果として把えられ、「意味を統合する」「反省的な意識」そのものが、言語の機能の一部をなしているのだという認識に至らない。

いいかえれば、彼らが言語系と社会系とを統一した構造的枠組の下に把えようとしたことの結果がここにあるといってもよからう。言語系も社会系も、単独には比較的単純な構造と説明原理を持っている。しかし、両者を論理的に一貫したものとして把えようとすると、二つの系の多様な接点は、急に問題を複雑なものにしてしまう。この本が「自明性」について述べながら、遂にその「自明性」を解く方向を示し得ていない理由は、恐らくこの系の取り扱い方にあるといえるだろう。

実際、言語系を単独に眺めてみればすぐ気がつくのだが、言語の比喻力は「自明性」の発生装置とも言える。「東京の胃袋」とか、「あの犬め！」というような表現に、われわれが何の異和感も懷かないのは、言語が、正確にいえばわれわれの言語意識が意味の範囲を適当な意味連関が得られるところまで、何らかの有縁な(motive)方向に拡張してしまふからである。本稿の用語法でいい直せば、直接の意味的な照合物を言表から発見できなかった認知系が、心理的なスキーマの集合を照合に活用したのである。しかも、ある文脈で「あの犬め！」という言葉が発せられれば、△あいつは密偵だ！▽という意味だけが意識の中に残されるのであって、△『あの』と言われたのは確かに俺も知っている人間だ。人間を犬というのはなぜだ？▽といった意識は残らない。その代り、△密偵▽という意味に、△裏切り者▽とか△卑怯者▽といった意味が暗黙のうちに付加される。これが、記号論で「コンテキスト」と呼ば

れる過程なのだが、「あの犬め！」と言表する方が、「あいつは卑怯な密偵だ」というよりもずっと、△卑怯者▽という意味を「自明性」としてつくり出せるところに特徴がある。

コノテーションをはじめとする言語の比喩的な側面は、社会が何らかの合意をつくり出そうとする時に、非常に高い頻度で出現する。マンハイムの用語法に従うとすれば、価値や規範としてのイデーを、われわれはイデオロギーとして意識するわけだが、この時にイデーとイデオロギーとの間にある差異は、言語の比喩的な力、意味の写像をつくり出す力という、言語系固有の作用を表わしている。観念的な共有物を表現する時だけでなく、むしろ、観念的な共有化を行なおうとする時に、この作用は動員される。その結果、誰れにとっても規範的でなかったものに、社会的な規範性が付与される。言語系に存在している間主観的な意味をつくり出そうとする圧力が、個人の認知システムに、言表から意味を発見するように促す。例えば流行現象といったものは、こうした「言語現象」としての側面を必ず持っている。

しかし、コノテーションや、その他の言語の比喩的な作用が、社会的な意味の「自明性」をつくり出すためのシステムだと考えることはできない。言語系の側から見る限り、あくまで、たまたまコノテーションが社会的な正当化図式に使われたということにすぎない。言語の比喩的な作用が社会的な統合機能に対して相対的にニュートラルであることは、しゃべりや地口からパロディに至る言葉の遊びが、同じように、言語にそなわった広義の比喩の力から生まれてくることからわかる。そうした系の性質について、十分な方法的自覚を持っていれば、コノテーションによって、広義のイデオロギー的な言表が「自明性」を獲得するというような過程を分析することは可能であろう。⁽⁴⁷⁾

言語現象について、このような視点に立つとすれば、社会的な現実が個人に対して持つ「自明性」と主観的過程に

おける個人的な意味生成の「自明性」とは結局一つの「自明性」に収斂する。いいかえれば、言語に内在する認知的機能と伝達の機能との力動的関係として記述されうる。この二つの機能は、バーガー・ルックマンが想定したような、等号で結ばれる関係にはない。言語が伝達の機能として持っているコード、代表的に言えば語彙体系は、人が言語を介して認知する意味範疇の領域よりもはるかに粗い。人は語彙体系によって明示的に規定された意味を大きく越えて、意味を認知する能力があり、社会的な言語現象はその能力を蓋然的な前提として進行している。個人にとっては、言表は一種の出来事である。彼がそこに意味を見出すということは、認知的な言語能力によって、それを何らかの形で構造化することである。したがって、ここに表われる構造的成分を記述していくという方法的な方針は成立しうる。しかし、そこで記述された構造が十分に安定したものであるという保証はどこにもない。それよりも注目すべきは、個人の意識においては、認知的な過程が、伝達の過程そのものとして感じられるという点である。つまり、読みとりに用いた彼の経験知の全体が、伝達的なコードであるかのように意識されるのである。しかし、それはしばしば幻想としてのコードであり、幻想としての「伝達」である。言語系が、こうした幻想としてのコードを生み出す機制を、社会的文脈に即しながら、認知と伝達の力動的過程として記述していくことこそが、言語社会学が当面めざすべきものであるといえるのではないだろうか。

これまで、(社会言語学を含む広義の)言語社会学が、言語と集団や階級、あるいは方言や敬語といった領域に考察を集中させ、言語のこうした作用を扱おうとしてこなかったことは、明らかに不当な取り扱いだといえる。現在のところ、この系列の研究は、R・バルトの記号論⁽⁴⁸⁾に例を見るだけである。この系列の研究は、その性格上、得られた言語的データの背後に映し出されるであろう意味の像を何らかの、観察者にとって主観的な解読の手続きによって描

き出さなければならぬ⁽⁴⁹⁾。それが言語社会学研究者達を立ち止まらせる原因となっている。彼らは、事実として与えられた言語的データと、社会的な変数との関係に、自らの方法的な立場を限定しているのだ。その結果、記号論におけるわずかな例外を除けば、広告の言葉、マス・メディアに登場する言葉といった⁽⁵⁰⁾、広大な言語社会的な現象群にこの角度からの分析が加えられていないのである。

(1) ここでいう「境界」領域とは、二つ以上の方法の体系が複合して形成された新しい方法体系によってのみ、記述されうるような対象の領域を指している。

(2) 例えば、フィッシュマンの社会言語学は、社会学的な要因によって、言語学的な変異を説明するというスタイルをとっているが、発想の根本には「ラディカル社会学」がある。(Fishman, Joshua. A "The Sociology of Language 1972 湯川恭敏訳『言語社会学入門』大修館書店 一九七四年)

(3) それが今のところ浮標にすぎないという点については、一九五二年に書かれた次のような証言がある。社会言語学の隆盛や社会学の中での言語への関心の増加はあるが、事態の本質はほとんど変わっていないように思われる。「言語学が文化人類学に密接な関係をもっていると考えられるのと同じ程度に、それはまた社会学に対して密接なつながりをもつ、ということになる。このような結論は、少なくとも原理的には、多くの社会学者によって容認されているようである。しかし、言語科学の成果が細目にわたって社会学的な問題に應用され得る限度は、ほとんど全く探求されていない。(Carroll, John B. "The Study of Language" 1952 大東百合子訳 大修館 一九七二年 一二六頁)

(4) Benjamin, Walter "Probleme der Sprachszologie-Ein Sammelrefarat" 1934 佐藤康彦訳 晶文社 一九八一年。

(5) Cole, Michael & Scribner, Sylvia "Culture & Thought: A Psychological Intruduction" 1974 若井邦夫訳 サイエンス社 一九七二年 八七頁。

(6) Bernstein, Basil "Class, Codes and Control Volume 1 Theoretical Studies towards a Sociology of Language" 1971

(7) Berger, Peter L. & Luckmann, Thomas "The Social Construction of Reality" 1967 Anchor Books p.185 山口節郎訳
新曜社 一九七七年 三一四頁。

(8) 後にみるように、バーガー・ルックマンは言語に、人間にとっての間主観性と主観性という二重の意味を付与して用いている。その意味で、デュルケームの言語理解よりも、さらに全面的だといってよいだろう。例外としては、もう批判に耐え得ないものとなったスターリンの言語理論から、言語が階級によって決定されるとみなしたマルの言語学などがある。

(9) 代表的な例をあげるとすれば、神話を言語現象として扱ったレヴィ・ストロースであろう。

(10) Berger, Peter L. & Berger, Brigitte "SOCIOLOGY—A Biographical Approach" 1975 安江孝司・鎌田彰二・樋口裕子訳『バーガー社会学』学研、一九七九年、八二頁。社会制度について、過度な単純化が見られるとすれば、この本が社会学の入門書として書かれているという事情を差し引いておかなければならない。しかし、ここにあらわれている、言語についての理解は、バーガーの現象学的アプローチ全体を環流しているといえると思われる。

(11) *ibid.* 邦訳、八六頁。

(12) *ibid.* 邦訳、八六～七頁。

(13) *ibid.* 邦訳、八七頁。

(14) 方言コンプレックスにも地域差があることが知られている。「一般に東北出身者は強い劣等感を持つが、九州出身者はそれほど劣等感を持たないことが多く、もし持つ場合には、その現われ方が攻撃的になると言われる。」(南不二男『現代日本語の構造』大修館三五頁。

(15) Berger, op. cit., 邦訳、九〇頁。

(16) *ibid.* 邦訳、九一頁。

(17) 成田康昭「記号空間の余剰性——ロラン・バルトの方法——」『思想』一九七九年四月号。

(18) こうした混線を避けるために、平野によって定式化された次のような「境界領域の設定に関する方針」を採用しておくことは大いに思考の経済となるだろう。

「言語は弁別すること、すなわち△示差▽にもとづく体系である。社会は満たすこと、すなわち△機能▽にもとづく体系で

ある。文化は選択すること、すなわち〈価値〉にもとづく体系である。その三つの重なり合う平面上に、人間社会がある。…中略…各体系に固有の制約に着目しなければ、対象を見定め、記述し、共有することができないのである。まして、そういう自明のことに注意深くなければ、体系間の境界問題に接近することさえできないのだ。」(平野秀秋「記号過程としての社会制度」一五四頁『日常と行動の記号論』一九八二年 勁草書房)。

- (19) Berger & Luckmann, op. cit., p. 129 邦訳、二一九頁。
- (20) 言うまでもなく「自然的態度」(natural attitude)はシュッツの『社会的世界の意味構成』(Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt)の基本概念である。日常生活における主観的意味連関が、「対象化」されて客観的現実となる点に注目したのは、バーガー・ルックマンの特徴といつてよからう。
- (21) Berger & Luckmann, op. cit., p. 35 邦訳、六一頁。
- (22) ibid., p. 38 邦訳、六四頁。
- (23) ibid., p. 133 邦訳、二二六頁。
- (24) ibid., p. 68 邦訳、一一七～八頁。
- (25) 真木悠介『現代社会の存立構造』一〇頁。
- (26) 同書 二三頁。
- (27) Berger & Luckmann, op. cit., p. 130 邦訳、二二〇頁。
- (28) ibid., p. 133 邦訳、二二五頁。
- (29) ibid., p. 135 邦訳、二二八頁。
- (30) ibid., p. 59 邦訳、一〇二～三頁。
- (31) Palermo, David S. "Psychology of Language" 1978, 村山久美子訳 誠信書房 一九八一年 二〇三頁。
- (32) 村田孝次『言語発達の心理学』培風館 一九七七年 七五頁。
- (33) 同書 一一七～一二七頁。
- (34) Palermo, op. cit., 邦訳、二二一頁。

- (35) *ibid.*, 邦訳、二〇五～六頁。
- (36) *ibid.*, 邦訳、二六〇頁。
- (37) Berger & Luckmann, *op. cit.*, p. 22 邦訳、三七頁。
- (38) Whorf, Benjamin L. 'Science and Linguistics' 1940 池上嘉彦訳 弘文堂 一九七〇年 五四頁。
- (39) Penn, Julia M. "Linguistic Relativity versus Innate Ideas" 1972 有馬道子訳 大修館書店 一九八〇年
- (40) Humboldt, Wilhelm Von "Gesammelte Werke" (Berlin 1841～52) VI, p. 98, 引用はペンによる。(Penn, *op. cit.* 邦訳、一八頁)。
- (41) Penn, *op. cit.*, 邦訳、一二頁。
- (42) Cole & Scribner, *op. cit.*, 邦訳 五四～六八頁。
- (43) *ibid.*, 邦訳、六九～七〇頁。
- (44) 野林正路 「語よりも語の重なりが意味を区別する」(一)～(三) 『日本語学』 一九八二年 十一月号～一九八三年 一月号 明治書院。
- (45) 野林 同書、(三) 六八頁。
- (46) Berger & Luckmann, *op. cit.*, p. 64, 一一一頁。
- (47) ただし、コノテーションによる分析にも、かなりはつきりと限界が見えている。例えば神話の分析にコノテーションは全く役に立たない。つまり、もっと定義域の広い、言語の意味作用の形態についての一般理論が必要なのである。結局、「自明性」の解明は、そのような、「意味関係の理論」の登場を待たなければならない。
- (48) Barthes, Roland "Système de la Mode", 1967
- (49) だからといって、比喩的な意味の拡張が全て、観察者の主観に帰すべきでないことはいうまでもない。むしろ言語は比喩的なレベルで普遍性を持っているといえる。例えばオスグットがSD法によって大規模に検証したところでは、十三カ国にわたる被験者は共通の内包的意味の構造(評価・力強さ・活動性という三つの意味的次元)を持っていることがわかった。また、情緒的意味体系の普遍性は、言語・視覚共感覚も説明できる。(ジョンは冷たい人間だ」という比喩的表現も普

遍性を有している。(いずれも Cole & Scribner op. cit., 邦訳、七九〇八三頁、による。)

- (50) 例外を一つだけあげておこう。Tuchman, Gaye “Making News—A Study in the Construction of Reality” 1978. これはニュースにおけるメッセージの構造を「フレーム」という操作概念から分析したものである。この研究は、シュッツinger フマンといった系譜から得られた注目すべき成果の一つである。

〈参考文献〉

- Mannheim, Karl, “Ideologie und Utopie”, 1929. 鈴木二郎訳 未来社 一九六八年。
- Barion, Jakob, “Was ist Ideologie?-Studie zu Begriff und Problematik-”, 1971, 講談社、一九七四年。
- Sperber, Dan, “Le Symbolisme en général”, 1974 菅野盾樹訳 紀伊国屋書店 一九七九年。
- 池上嘉彦 『意味論』 大修館 一九七五年。
- Rumelhart, David E., “Human Information Processing”, 1977 サイエンス社 一九七九年。